

江戸時代における豚の飼育と薩摩藩

井上 忠 恕

Inoue, T. (2018). Swine breeding and the Satsuma domain in the Edo period

All about SWINE 53, 25-30

1. わが国の養豚の沿革

畜産発達史（農林省畜産局編）¹⁰⁾によれば、「わが国の養豚の沿革については記録の徴すべきものは少なく、これを詳述することは困難であるが、一般農家に普及を見るに至ったのは明治維新以降のようである。」と記され、明治以前の養豚については深く触れられていない。

日本では古来、食用の家畜を育てる習慣が少なく、主に狩猟で得たシカやイノシシの肉を食していた。仏教伝来以降は、獣肉全般が敬遠されるようになったが、日本人の間で全く食べられなくなったという時期は見られない。獣肉に関する嫌悪感も時代とともに変わっていったが、おおむね、狩猟で得た獣肉は食して良いが馬や牛などの家畜を殺した獣肉の喫食は駄目であり、そして足が多いほど駄目である（哺乳類>鳥>魚）と考えられることが多かった。

一方、琉球王国は中国（明）とのつながりが強かった時代において、しかも獣肉食のタブーなどと無関係であったこともあり、豚が伝来してから養豚は瞬く間に広がっていった。琉球への豚の伝来は諸説あるが1385年「明国から豚を持ち帰った」と言う記録を定説としているものが多い¹⁵⁾。奄美諸島における島豚は、琉球の島豚の養豚と並行して始まったものと理解することができるし、

島豚の普及には中国からの「冊封使」^{さくほうし}もまた密接に関係していた。琉球王が替わり交代するごとに王として認めるために遣わされた冊封使は15世紀から19世紀まで22回やってきた。冊封使が消費する食料は膨大で、特に豚肉の確保には特に苦心しており、そのため琉球は養豚を奨励し、琉球の支配下にあった奄美諸島は豚の供給地の役割を担っていた。

2. 鹿児島における養豚のはじまり

鹿児島県畜産史⁹⁾によれば「本県の養豚業はその起源は甚だ古く、山間の農村及び沿岸漁民の部落は、^{おうじやく}往昔より黒色矮小の豚を飼養したるもの如し、^{しか}然りと雖も是等に関する記録及び^{こうひ}口碑を^{あた}探求する能はず、従ふて往昔の事知るに由なし。」と記載されている。

鹿児島県本土で豚が飼われていたことを示す最も古い記録は⁴⁾、ポルトガル人によるものがあり、ポルトガル人は1570年までの27年間に18隻のポルトガル船が島津領に入港している。そのうち1546年鹿児島県山川港に来航したジョージ・アルバレスは半年間に山川港を中心とした「日本報告」をしており、その中に「家畜は豚、羊（山羊の翻訳間違いか？）、鶏などがおり、また人々はシカやウサギ、キジ、カモなどを捕らえ

て食用とする」と紹介している。

ここにおける山川港近郊で飼われていた豚はどこからきたかについては、数千年の養豚の歴史を持つ中国が関係しているのは間違いないであろうが、明確な証拠はない。豚の伝来については二つの説があり、一つは倭寇^{わこう}を介したルートと、もう一つは明の支配下にあった琉球を中継して伝えられたとするものであるが、この琉球ルートこそが、最も有力とされている。

薩摩藩は1609年に総勢3,000人の大軍で奄美、沖縄に侵攻して大勝し、その際「豚を持ち帰った」とされている。これを契機に島津領では広く豚の飼育が広まった。

一方、明が滅んだのが1644年だが、すでに16世紀の末ごろから、明国内は政治的に大きな混乱を呈していた。そのため、政府高官、医者、学者、技術者などのなかに、琉球や日本へ、なかでも薩摩へ脱出・亡命する者が続出した。坊津（南さつま市）などの漁港を中心に、明人が作った唐人町があった。そこでの食生活は当然中華風であったろうから、豚肉を食べる習慣を持ち込んだのではないかと推測される。

3. 鹿児島における豚肉食

豚骨料理は鹿児島で作られる郷土料理の一つであり、地元において「豚骨」という言葉はこの料理を指す³⁾。「豚骨」はぶつ切りにした豚の骨つきあばら肉などを、大根やコンニャクといっしょにやわらかく煮た料理である。薩摩兵児^{さつまへこ}（若者たち）や健児^{けんでい}の舎^{しや}（明治以前からの青少年修煉場）の祝い行事などに、男手でなされる料理で、焼酎を飲みながら車座でなべを囲み、取り分けながら食べる野外料理である。

鹿児島ではごく近年まで仏教的な理由で労役に飼う牛や馬は食べてはいけないという習慣があったが、豚と鶏は昔から「歩く野菜」といわれるほど自家飼い豚を持ち、祝い事や行事の料理につぶした。

原口泉⁸⁾は、「豚肉を食べる風習を持った琉球との関係、薩摩藩が狩猟を奨励したこと、そして中央から遠かったこと、この三つが他地域に比べて獣肉食へのタブー観念が薄かった大きな理由だろう」と推測している。その上で薩摩藩内の各地で「豚は何らこだわらなく、食べられてきたのでは」と見ている。

1728年11月に薩摩藩主の命を受け大坂に向けて薩摩の港を出帆した若潮丸^{しほ}は時化に会い太平洋を漂流し翌年6月にカムチャッカ半島に漂着した¹³⁾。乗船していた少年ゴンザ（当時11歳で1739年12月に21歳で死去）とソウザ（1736年9月に43歳で死去）は生き残り、後に二人は日本語教師となり、ゴンザが中心となり2年間で世界初の露日辞典を編纂し、その後合わせて6点を著作した。露日辞典は12,000語から16,000語におよび、日本語は薩摩弁であった。その中に豚に関連する用語で、ハムを「シオシタブタ（塩した豚）」、豚肉を「ブタンミ」、豚屋を「ブタヤ」、豚の出産を「ブタンコモツ」などと翻訳している。ゴンザらは現在の薩摩川内市の辺りの小さな漁村⁵⁾の出身であり、少年にも「塩した豚」など豚肉食が存在していたことを示している。

4. 江戸薩摩藩邸跡の発掘調査からみた豚の飼育

東京都港区にあった江戸時代の薩摩藩島津家の芝上屋敷（薩摩鹿児島島津家屋敷跡第2遺跡）の発掘調査が1995年から1997年にかけて行われ、



図1 安政江戸近郊図から薩摩藩邸上屋敷付近（安政四年作，須原屋版）

その後、詳細な分析調査が行なわれた^{7, 19)}。この遺跡地の多くを占めていた薩摩藩上屋敷（図1）は、現在の都営地下鉄三田駅付近から日本電気本社ビル、ホテルザセレスティン東京芝、戸坂女子短期大学などを含む広大なものであった。13代将軍家定に輿入れするために江戸入りした天璋院篤姫は、ここ薩摩藩上屋敷に入り江戸暮らしを始めた。戊辰戦争の契機になった、薩摩藩邸焼き討ち事件の舞台ともなった。大半は江戸時代、薩摩鹿兒島島津家の上屋敷として機能していた。

考古学発掘調査では17世紀前葉から19世紀に至るまでの遺構が400基以上確認され、陶磁器を中心とした膨大な量の遺物も出土している。動物遺体は貝類、甲殻類、魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類が確認されているが、哺乳類の出土が目立っている。発掘された資料の保存状態はとてよく、多くの動物種が同定されている。破片数をもとに、各種の割合をみると、イノシシま

たはブタがもっとも多く、全体の58%を占めている。次にシカが23%、犬10%、ネコ4%、ウマ3%の順で、その他の種は極めて少ない（図2）。仙台藩上屋敷跡（汐留遺跡）でも多量の動物骨を出土しているが、多くはイヌやネコといった愛玩動物で、ついでシカとウマであり、イノシシまたはブタはとて少ない（図3）。

江戸薩摩藩邸跡のイノシシ骨またはブタ骨には、サイズの小さいブタと大きいブタ、さらにこれらの両者の形態的特徴が不明なイノシシあるいはブタの3種類が存在することがわかった。ブタはイノシシを家畜化したもので、出土骨のブタとイノシシの区別が難しい場合が多い⁶⁾。年齢は1歳から2歳のものが多いことから飼育されていた可能性が高い（図4）。また、骨に解体痕が認められ、屋敷内で解体・調理が行われたと考えられる。

小型のブタは成獣でも100kg以下の小型ブタ

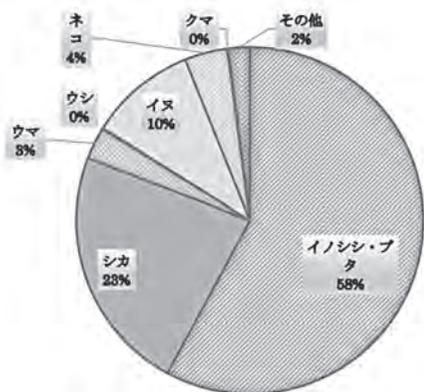


図2 江戸薩摩藩邸跡陸獣種構成 (2,091点)
(江戸動物図鑑⁷⁾より)

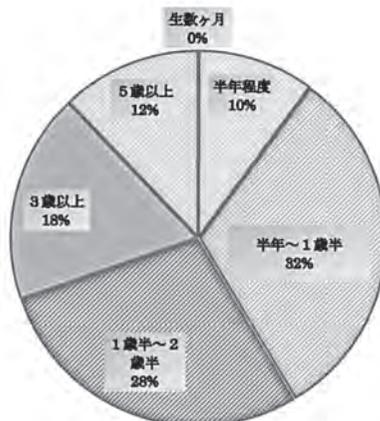


図4 江戸薩摩藩邸跡のイノシシまたはブタの年齢構成 (40個体)
(江戸動物図鑑⁷⁾より)

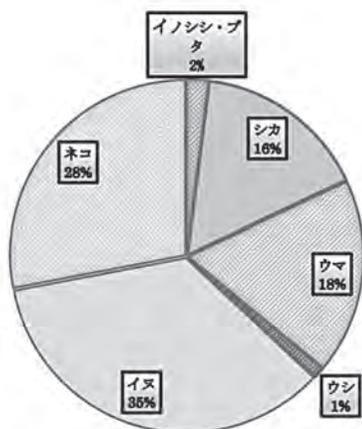


図3 江戸仙台藩邸 (汐留) 遺跡陸獣種構成 (292点)
(江戸動物図鑑⁷⁾より)

で、薩摩藩特産の黒ブタの可能性が高い。また、成獣で100kgを超える大型のブタは、中国大陸か、ヨーロッパから持ち込まれた大型の「白ブタ」と推測される。

この発掘調査の結果からも、江戸時代にブタが飼育されていたという文献資料が裏付けられたわけである。

さらに、江戸時代には禁忌とされていた四つ足

の獣、とりわけ豚が当時の鹿児島藩でも食されていたことが判明している。薩摩藩の行事・接待の際の献立を記した「御献立留 (鹿児島市尚古集成館蔵)」²⁾によれば、「猪」,「鹿」や「にく」などの獣肉名が見られ、「にく」は豚もしくはカモシカを指すものとみられている。江戸藩邸でも同様の獣肉が食べられていたとみられ、江戸薩摩藩の豚は美味であったのか、佐藤信淵の経済要録¹²⁾には「薩州侯ノ邸中ニ養フ豚ノ白毛豚ハ殊ニ上品ナリ」と書かれており、後に江戸幕府最後の将軍となる一橋慶喜 (徳川慶喜) が薩摩藩士を通して豚肉を無心する書簡が残っており、「豚一様」とあだ名されていた⁸⁾。

5. 江戸時代の獣肉食

江戸時代の遺跡から動物骨が多く出土したが、その主なものは貝類、魚類および鳥類が主で、まれに哺乳類がみられる。江戸時代の人は魚介類や鳥類を主な動物蛋白源としていたといわれている¹⁷⁾。哺乳類ではイヌの出土量が多いが、シ

カ、イノシシや一部のイヌが食料となったとみられる。イヌの骨の多くは愛玩用で、埋葬されたものである。動物遺体が採集された遺跡の多くは武家屋敷跡が多く、動物骨が庶民の食料を反映しているとは思われないし、武家の食料としても日常食かどうかは疑わしい。江戸の薩摩藩邸以外の遺跡からも少量ではあるが、ブタの骨が出土しており、江戸時代の人々がブタをある程度見て、知っていたことは確実である。

大名家の獣肉食について平戸藩や薩摩藩にはかなりの記録がみられるが、薩摩藩は突出している。当時、全体的には獣肉食は少なく、日本人の四つ足動物への穢けがれの意識が影響していると考えられる。外国とのつながりのあった長崎や鹿児島などは、特に、中国料理などが日本化した宴会料理の一種の卓袱料理しっぽくの素材に使われた豚肉をはじめとする獣肉食は少しずつ周辺へ広まっていったようである。

一方、広島では「京などに犬にあるごとく家々町々の軒下に多し」と、橘南谿¹⁴⁾が他の国では見られない珍しい物として豚を「東西遊記」に記している。多くの豚が町中にいたことは、目的は定かではなかったが食用にはされていなかったと理解されている。

豚が都市のごみ処理と犬の餌に利用されたのは、江戸時代初期の新しい現象であった¹⁷⁾。また、“どぶ”や台所の残渣を食べさせ太らせた豚を、将軍家や大名家では大型猟犬などの猛犬の餌として与えていたとの記録がある¹⁸⁾。これらのことは豚への、また豚利用者への卑賤視ひせんしを強めたことは間違いない。さらに、徳川綱吉による生類憐みの政策は、豚への卑賤視をなお強めた可能性が考えられる。少なくとも江戸時代の文献には豚を

卑猥のものともみている¹⁶⁾。それはその後、日本人の外国人観にも及んだかに見える。

H. デンベック¹⁾によると、ヒツジに対してブタを穢れたものとする見方が、古代のエジプトから18世紀のドイツまであったことを教えてくれる。豚肉を食べることは、イスラム教、ユダヤ教や、あるキリスト教系の新宗教で戒律上禁じられており、現在でも比較的良く守られている。日本では宗教的なものとは異なるが、近代の日本人のブタ観は、あるいはこうした西方文化のブタ蔑視感覚にも補強されたかもしれない。明治維新後の文明開化の肉食謳歌が、中国・朝鮮での肉食より欧米人の肉食への習いであったことと、そこでの肉は何より牛肉であったことの影響であろう。

明治政府が国民の栄養改善を図るため、豚飼育を表だつたものにしていくつかの試みがあったが²⁰⁾、獣肉食禁忌観念の払拭には馬、牛や羊に比べて、豚は端役で、豚への賤視観念が底流として存続していた可能性を捨てきれない。

6. おわりに

文献調査をもとに江戸時代の豚の飼育について、薩摩藩を中心に調べた。豚の伝来には何よりも中国（明）が強く関わっており、琉球王国は、明との友好関係を保ちながら、貿易などを通して経済や文化などを着実に発展させていき、約400年もの間繁栄していた琉球に、豚の飼育がもたされた。さらにこれが奄美諸島へと伝わり、さらには薩摩藩が琉球王国を侵略したことが、薩摩への豚飼育と豚肉文化を広めることになった。

江戸薩摩藩邸跡の発掘調査により考古学的に江戸時代の豚の飼育が確認されたが、これはあくまでも一つの藩の例であり、広く養豚がはじまるの

は明治維新後である。

豚の飼養頭数が統計上¹⁰⁾にはじめて表れたのは1884年(明治17年)で25,982頭、その後増減を繰り返しながら第2次世界大戦前の最高頭数は1938年に114万頭となった。終戦翌年の1946年に8万頭と減少したが、食糧事情の緩和、飼料事情の好転、食生活の向上による食肉需要の増大に支えられて、1953年には戦前の最高頭数にならぶ114万頭にまで達した。その後1989年までは増加の一途をたどった(1,186万6千頭)後、漸減し、2018年時点で飼養頭数は918万9千頭(農林水産省畜産統計¹¹⁾)である。中でも鹿児島県は127万2千頭で1位で、2位は宮崎県82万2千頭である。今日の飼養形態、経営環境が変わってきたといえ、このことは薩摩藩で豚の飼育が江戸時代から始められていたことと、全く無関係ではなさそうであり、養豚の礎が醸成されていたのであろう。

本稿を執筆するにあたり、貴重なご助言をいただいた岩村祥吉氏(農業・食品産業技術総合研究機構)に感謝いたします。

参考文献

- 1) H. デンベック(小西正泰, 渡辺清訳): 家畜のきた道(動物の文化史2), 築地書館(1979)
- 2) 江後迪子: 江戸初期の島津家の食卓, 鹿児島県立図書館(1996)
- 3) 石神千代乃: さつま料理歳時記, 金海堂(1973)
- 4) 鹿児島県養豚振興協議会編: 鹿児島県養豚史, 鹿児島県養豚振興協議会(1996)
- 5) 駒走昭二: 神奈川大学人文学会誌163巻, 155-172, 神奈川大学人文学会(2007)
- 6) 黒澤弥悦: イノシシがブタになるとき一どのように始まるのか?, ALL about SWINE 43: 49-57 (2013)
- 7) 港区立港郷土資料館編: 江戸動物図鑑: 出会う・暮らす・愛でる: 開館二十周年記念特別展, 港区立港郷土資料館(2002)
- 8) 宮路直人: かごしま黒豚物語, 南日本新聞社(1999)
- 9) 中村初枝等編: 鹿児島県畜産史下巻, 九州聯合第二回馬匹第一回畜産共進会協賛会(1913)
- 10) 農林省畜産局編: 畜産発達史, 農林省畜産局(1966)
- 11) 農林水産省畜産統計(平成30年2月1日現在)(<http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/tikusan/>)
- 12) 佐藤信淵: 経済要録 卷六, (1827)
- 13) 田頭壽雄: 漂流民・ゴンザ, 春苑堂出版(1998)
- 14) 橘南谿著, 宗政五十緒校注: 東西遊記2, 平凡社(1974)
- 15) 當山眞秀: 沖縄県畜産史, 那覇出版社(1979)
- 16) 塚本学: 生類をめぐる政治, 平凡社(1993)
- 17) 塚本学: 江戸時代人と動物, 日本エディタースクール出版部(1995)
- 18) 上野益三 監修, 吉井始子 編: 食物本草大成 第6巻, 臨川書店(2007)
- 19) 山根洋子: 近世江戸の鳥獣類利用—大名藩邸跡出土資料より, 動物考古学, 30号—20周年記念号—, (2013)
- 20) 吉川正通: 協教社衍義について: 明治初期社会教育の背景, 社会問題研究. 21 (3・4), 79-88 (1972)